関西自然保護機構会誌 27（2）：3－4，2005

シンポジウムの趣旨について
田園の生き物を考える
－特に外来生物と営農，生態系保全を中心として－

滋賀県立大学名誉教授　小　林　圭　介

On the aim of a symposium. Towards the coexistence with the living organisms in rural areas －Mainly on alien species, agriculture and ecosystem conservation－.
Keisuke Kobayashi（*Emeritus Professor of The University of Shiga Prefecture*）

近年，生物多様性の保全に向けた国際的な取り組みの進展を受けて，我が国においても各種の取り組みが進められている。まず，絶滅のおそれのある希少な野生生物の保護にかかわる「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」が1992年に制定され，全国的にみて希少な野生生物の捕獲・採取規制やその生息地の開発規制などの取り組みが進められている。また，絶滅のおそれのある野生生物のみならず，生物多様性の保全全般を対象とした戦略的な取り組みを進めるため，「生物多様性国家戦略」が1995年に地球環境保全閣僚会議で決定されている。さらに一層の取り組みを推進するために，2002年には「新・生物多様性国家戦略」が定められた。

一方，そうした戦略の策定・改定に加えて，具体的な対策の面でも近年では進展が見られる。具体的には自然環境の保全，再生，創出，または維持管理を行なうことにより，生物多様性の確保を通じて自然と共生する社会の実現を図ることを目的とする「自然再生推進法」が2002年に制定されている。また，アライグマやヌートリア，湖や池に放たれたオオクチバス，ブルーギルなどの外来種により，在来の野生生物の生息・生育環境が奪われたり，捕食されたりすることにより著しくその数が減少したりすることを食い止めるため，2004年には「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」が制定され，生態系や農林水産業等に係る被害を及ぼすか，またはそのおそれのある特定外来種の輸入，飼育等を禁止するとともに，その積極的な駆除を進めることとしている。

しかし，既に琵琶湖や多くの池沼ではオオクチバスやブルーギルといった外来魚の大繁殖によって多くの在来魚が絶滅の危機に追いやられるなど深刻な事態を引き起こしている。陸域でもアライグマやハクビシンなどによる農作物被害が深刻化しつつある。最近になって，琵琶湖からピラニアが発見されたり，大阪府ではサソリがマンション内から見つかったり，住民の不安も高まりつつある。また，国外から導入された外来種のみならず，他地域から本来そこに生息していない野生生物が導入されることにより，地域固有の野生生物が駆逐され，あるいは交雑による遺伝的撹乱が生じるおそれも顕在化しつつある。さらに，大規模な開発事業のほか，公共工事にともなう緑化に当たっては，外来種のうち生態系に被害を及ぼすおそれ

がある種を持ちこむことによって地域固有の生態系の撹乱を引き起こしかねないような状況にある。

特に，田園地域では農薬や化学肥料の使用，営農形態の変化，圃場整備などによる在来生物の減少とともに，国外または国内の他地域から人為によって意図的・非意図的に導入されたり，侵入する生物が増加している。そして，このことが田園地域固有の生物相や生態系，田園景観にとって大きな影響を及ぼす結果になっている。したがって，これまで人々の生活を支えてきた田園地域の生き物の多様性の保全と広範に蔓延しつつある外来生物に，今に生きる我々はどのように対応すべきなのか，喫緊の課題となっている。

こうした背景のもとに，「田園の生き物を考える－特に外来生物と営農，生態系保全を中心として－」をテーマにシンポジウムを開催することとした。シンポジウムでは，まず大阪府立大学大学院生命環境科学研究科教授の石井実氏による「田園の生態系を脅かす外来生物－特に外来昆虫に注目して－」と題して基調講演が行なわれた。その後，京都大学名誉教授の渡辺弘之氏が「田園地域の地表・地中の動物について」，神戸大学発達科学部助教授の武田義明氏が「兵庫県但馬地方における調整水田の植生と貴重種」，滋賀県農村振興課の円山徹氏が「田園景観の保全と営農活動」，多賀町立博物館・自然と文化の館学芸員の金尾滋史氏が「琵琶湖周辺の水田地帯における魚類について」，最後に同志社大学講師の村上興正氏が「外来種の管理－特に田園について－」に関して，それぞれが話題提供を行なった。その後，石井実氏も含めて外来種問題についてのパネルディスカッションが参加者と一体となって活発に行なわれた。